

第22回日本気象学会夏期特別セミナー (若手会夏の学校) の報告

第22回日本気象学会夏の学校実行委員会*

1. はじめに

第22回日本気象学会夏期特別セミナー (若手会夏の学校) が、2010年7月17日 (土) から19日 (祝) までの2泊3日の日程で、京都府京都市にある京都府ゼミナールハウスにおいて、京都大学が主幹となって開催されました。総勢106名の方々にご参加いただき、参加者の年齢層は、学部生14名、修士68名、博士17名、その他7名であり、例年通り修士が全体の7割近くを占めました。参加者の皆様に感謝申し上げます。

今回は、例年夏の学校の主な企画である招待講演に加えて、参加者全員による口頭発表が行われ、勉強および活発な議論の場となった他、夜には懇親会が催され、参加者の間で深い親睦が築かれました。非常に充実した3日間になったと感じております。

2. 招待講演

招待講演では、第一線で活躍されている3名の研究者を講師としてお招きし、ご講演をいただきました。当日は先生方のご研究内容に加えて、ご自身の体験談や研究に対する考え方、また若手へのメッセージなど、普段なかなか聞くことのできない貴重なお話を伺うことができ、一同非常に有意義な時間を過ごすこと



第1図 参加者集合写真.

ができたと思います。講演要旨は以下の通りです。

・7月17日 (1日目)

○齊藤和雄氏 (気象研究所予報研究部第二研究室室長)

「研究者人生の転機とNHM開発エピソード」

齊藤室長には、気象大学校での卒業研究から現在に至るまでの先生のご研究の足跡をたどりながら、特に研究者人生の転機となった出会いや研究エピソードについてお話いただきました。また講演の後半では、非静力学モデル (NHM) の開発に関して、開発初期の状況や技術的困難をいかに克服したかなど、大変貴重なお話を当時の資料を交えながら紹介していただくとともに、NHMの現状および最近の取り組みについてもお話いただきました。さらに、参加者に向けたメッセージとして、若い世代の力で新しい時代を切り拓いて欲しいとの力強いエールを頂きました。

* 代表: 宮本佳明 (京都大学大学院理学研究科).
natugaku@gmail.com

© 2010 日本気象学会

○重 尚一氏（京都大学大学院理学研究科准教授）
「私のささやかな冒険（＝研究）談 ～学部生時代から現在までを振り返って～」

重准教授には、ご自身の学部生生活にはじまり、研究の世界に入った経緯・動機、院生時代の海外での経験、博士課程修了から現在に至るまでに経験された転機など、興味深い数々の経験談を交えながら先生のこれまでのご研究を紹介していただきました。さらに、現在取り組まれている衛星搭載センサによる観測量から降水量などを推定するアルゴリズム開発についても解説していただきました。また、これまでを振り返っての先輩からのメッセージとして、常に新しい挑戦を心がけて、凝り固まった自分自身を再生していくことを提言していただきました。

・ 7月19日（3日目）

○酒井 敏氏（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）

「都市はなぜ暑いのか？」

酒井教授は「都市はなぜ暑いのか？」というテーマの答えとして都市の気温が高いから暑く感じるのではなく、構造物やアスファルトが発する輻射熱によって暑く感じるということを教えて下さいました。その際都市の多点温度観測に使用する温度計の作り方について映像を交えて解説していただきました。さらには鉄板による輻射熱の実験を実施していただき、参加者はその効果を実感しました。またご自身が開発されたフラクタルひよけの効果と植物の構造とのアナロジーから考えだされたその仕組みについて解説していただきました。最後に研究者として失敗を恐れずに「常識を疑うこと」の重要性を我々参加者に教えて下さいました。

3. 一般講演

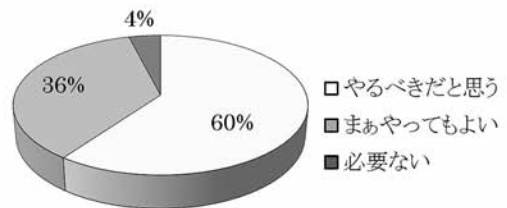
2日目には、参加者全員が自身の研究内容・興味を持っている内容について学会形式で発表する機会を設けました。この企画は、自分以外で同様の研究テーマを持つ人と知り合うこと、及び、自分が何に興味（疑問）を持ちどう向き合っているのかを知ってもらうこと、を目的としています。発表は16の細かなセッションごとに分け、一つの会場で1日4セッション、つまり同時に4つの会場を利用して行われました。会場間は移動可能なので、基本的に各人の興味ある内容の発表を聞いていただけたと思っております。発表時間

は、5・10・15分の中から各人で選択できるようにし、その際興味の対象も選択してもらい、セッションに分類する際の参考にさせていただきました。発表時には司会・進行役として座長を配置し、マイク・照明・タイムキーパー役も京都大学の学生スタッフ（約30名）が手分けして行いました。

この2日目を通して、当初危惧していた時間超過によるプログラムの遅延も無く、大きな問題が生じる事無く無事終了することができました。また2日目終了後には、各人が参加したセッションの中で最も印象に残った発表に対して投票してもらい、最終日に結果を発表致しました。この際、M1以下の方々の発表に対しての同様の投票も行いました。

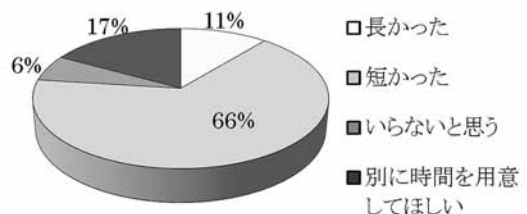
この企画に対する感想を図にまとめております（全参加者の約50%より匿名で回答をいただきました）。第2図は、次回以降も引き続き参加者全員が発表する機会を設けるべきか否か、第3図は議論の時間が十分であったかどうかについての感想です。来年以降も行うべきと思っておられる方が60%に達し（第2図）、今回の集計結果では、この企画が成功であったことが

参加者全員発表



第2図 参加者が全員発表することに関するアンケート結果。

発表後の議論の時間



第3図 発表後の議論用の時間の必要性に関するアンケート結果。

示唆されます。一方で、発表後に討論する時間が短すぎるというご意見を多く頂きました（第3図）。確かに、各発表に関する質疑の時間は発表者にお任せしていただくため、平均1分弱であったと思われます。せっかくの同じ興味を持つ友人と出会う機会であるので、発表内容を基に議論する時間があれば、なお良いと思います。しかしながら、今回は初めての試みであったこともあり、時間の制限からこれ以上議論の時間を設けることは難しかったのが現状でした。

4. おわりに

夏の学校にご参加いただき、企画・運営にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。また、今回も日本気象学会から資金援助を受けました。おかげさまで内容の濃い、素晴らしいセミナーにすることができました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

次回（2011年）の夏の学校は東北に場所を移すこととなります。主幹となる東北大学の皆様を中心となって、充実したセミナーを催して下さることを願うとともに、それを通して学生・若手研究者間の交流がさらに活発になることを期待しております。